

告 辞

本日ここに、中重霧島市長様をはじめ、本校の名誉教授でもある河野霧島市教育委員会教育委員、相良同窓会長、徳永後援会長の皆様にご来賓としてご臨席を賜り、鹿児島工業高等専門学校第54回卒業式並びに第20回修了式を挙行できますことは誠に慶びにたえません。

晴れて本科卒業の日を迎えられた181名の皆さん、専攻科修了の日を迎えられた24名の皆さん、誠にめでたうございます。鹿児島高専の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。入学後、勉学に励まれ、研鑽を積まれてきた皆さんの榮譽をここに称えます。

特に、遠く故郷を離れ、言葉のハンディを乗り越えて勉学に励み、卒業を迎えられた留学生のナジフ君に対し、心から賛辞を送りたいと思います。

皆さんは今この場所で、準学士の称号と学士の学位記を手にし、高専でのこれまでの生活を振り返っていることでしょうか。本校へ入学後、自分の進路について迷った時期があったかもしれませんが、学年が上がるにしたがって、授業や卒業研究を通して、今では社会に貢献できる技術者としての資質が身についたのではないのでしょうか。

さて、現代社会は、地球規模での困難で緊急度の高い数々の問題に直面しています。地球の気候変動や環境破壊、大規模な自然災害や原子炉の処理、世界的な感染症の拡大などは、人類の社会経済活動の急速なグローバル化により顕在化してきたものと考えられます。

今まさに世界を席卷している新型コロナウイルスパンデミックも、その一つでしょう。一昨年末に中国の一都市に発生した新型コロナウイルスはまたたく間に世界中に拡大し、すでに全世界で1億2000万人以上が感染し、死者も268万人を超えるに至っています。

今年度は、この新型コロナウイルスに振り回されました。4月16日に全国的に緊急事態宣言が発出されたこともあり、5月2日から5月22日までの期間、これまでやったことがなかった遠隔授業を実施しました。

その後、5月25日から対面授業を再開しましたが、朝は30分遅らせ、昼休みも30分延長し、密集の緩和を図りました。学生会も放送で、学内から感染者を出さないという強い決意のもと一人一人が常に意識して行動をしましょう、と夏休みまで毎日アナウンスしてくれていました。

これまで想像もしなかった新たな学校生活を皆さんは経験してきたわけですが、さまざまな常識が一変しているのを肌で感じ取ったのではないかと思います。

新型コロナウイルスパンデミックをきっかけに、世界は今、大きく変わろうとしています。終業式で、ニューノーマルというキーワードを紹介しましたが、社会に大きな変化が起こり、変化が起こる以前とは同じ姿に戻ることができず、新たな常識が定着することを意味している言葉です。

新型コロナウイルスに現時点で収束の目途がたっていないことから、ビフォアコロナには戻りませんし、アフターコロナではなく、ウィズコロナとしてのニューノーマルな生き方が求められるようになりました。

コロナ禍が過ぎ去るのを待つのではなく、コロナ禍の中で生きていく“すべ”を考えなければいけません。

一方で、感染者やその家族、完治した人や感染症に関わる人に対する接し方が課題になり、思いやりを持つことの重要性を再認識しました。

そこで、最後にみなさんに、千利休の教えの「直心の交わり」という言葉を贈りたいと思います。

茶道では、客のために主は、自分で道具を取り合わせ、水を運び、薪をとり、炉で湯を沸かしてお茶を点てます。そして、まず、神仏に供え、客に与え、われも喫むのです。客が帰った後は、客に対して足りなかったことを虚心に振り返りながら、炉を前に余情残心の境地に入り、明日に対する新たな心構えで後始末をするそうです。

この教えを日常生活にあてはめて暮らすならば、だれかれの隔てなく心からの交わりをすることができるというものです。

これは、単に相手とのコミュニケーションの重要性を説いた言葉ではなく、時間や物理的な概念を超えて、「誰が為に」という相手に心を寄せることの大切さを説いた言葉だと思います。

確かに相手が目の前にいて、いかにコミュニケーションをとろうとしても、そこに心がなければ相手と通じることはないと思います。反対に目の前に相手がいなくても、相手に心を寄せれば、きっとその気持ちは相手にも通じるでしょう。

相手に心を寄せること自体が大切であり、それを基本とすれば、きっと相手とのコミュニケーションや関係を良くしてくれるはずです。

この心がけが我々にとって大切なのです。ぜひ「直心の交わり」を心に留め、相手に心を寄せてほしいと思います。

さて、社会に巣立つにあたって今、みなさんの中には卒業・修了の喜びと同時に一抹の不安が交錯している人もいるかもしれません。しかし、高専での生活は、必ずやみなさんの誇りとなり、新しい社会生活での自信につながるものと信じます。

昨年までに本校を巣立った8,455名の卒業生は、国内外の様々な分野で活躍されています。本校に対する社会からの高い評価は、何よりも卒業生の社会での立派な活躍の賜物であると思っています。みなさんも、これまでの卒業生に続いて行かれることを確信しています。

また、本校の卒業生は固い絆で結ばれています。みなさんも、生涯の友人として末永く付き合いを続け、ときには助け合っていてほしいと思います。それがみなさんにとってかけがえのない財産になると信じます。卒業後は、同窓会活動などを通して、学校との絆もずっと持ち続けてください。

学校への評価は、いかなる卒業生を社会に送り出したかによって決まります。どうか母校の名誉と後輩への広い途の開拓のため、立派な社会人として活躍されんことを祈ります。

みなさんの卒業並びに修了を今一度祝福し、みなさんの前途に輝かしい未来が開かれますよう心からお祈りして、告辞いたします。

令和3年3月19日

鹿児島工業高等専門学校長

氷 室 昭 三